

年少者教育における日本語の漢字指導

—中華学校小学3年次に対する実践報告—

TEACHING JAPANESE KANJI TO 3rd YEAR OF ELEMENTARY SCHOOL
AT OVERSEAS CHINESE SCHOOL IN JAPAN

引田梨菜, 専修大学

Rina Hikita, Senshu University

1. はじめに

1.1 中華学校とは

そもそも中華学校とはどんな学校なのだろうか。中華学校は日本全国に台湾系と中国大陸系合わせて5校ある。中華学校とは、日本に在住する華僑華人子弟の教育を目的としている学校である。陳(2009)では、「華僑華人とは、広く『海外に在住する中国系の人々』を指す」と定義している。

以前は、「民族学校」としての色彩が強かった中華学校だが、10数年ほど前から入学希望者が急増している。黄(2005)では、中華学校の現状を以下のようにまとめている。「最近では中国の文化背景をもたない日本人の生徒も入学するようになり、その割合が約2割、残りの7割ほどの華僑の子女の状況も一律ではなく、大陸から転入してくる生徒もいるし、日本で生まれ育つ生徒もいる。このように、在籍者の文化背景と母語の状況が複雑であることから、双方向型の上に、どちらかの母語を維持するだけの教育ではなく、『双方向・双向上型バイリンガル教育』が行われている。以上から、中華学校での教育は民族教育の定義ではくくれない」としている。また、現状として、中華学校には、4月始まりの学校と9月始まりの学校の2種類があり、私が指導にあたっていた学校は4月始まりだった。このことから、中学校、高校、大学と進学していく中で、いずれは日本の社会に入っていくことを前提にして、勉強している児童を対象にしている学校といえる。

1.2 中華学校の言語教育

中華学校では、中国語はもちろん、日本語、英語の3つの言語教育が行われている。陳(2009)によると、「小学部の言語の授業はそれぞれネイティブの教員が行っている」ということだ。また、日本語と英語の授業以外は、中国語で行われる。それだけでなく、日本語以外の科目は実際に現地の小学校で使っている教科書を使用して指導していた。

筆者が指導にあたっていた中華学校では、全校行事として、1年に1回、それぞれの言語のスピーチコンテストが行われており、どの言語もそれぞれ伸ばしていこうという姿勢が見られた。

1.3 クラス編成

1 クラスはだいたい 30 名程度、小学 1 年次の入学の際に入学試験があるため、男女比は学年・クラスにより様々だ。また、2 クラス以上ある学年は年度ごとにクラス替えがあるが、全教科の成績により、クラスによって差がでないように決められていた。つまり、先行研究がまとめていたように、様々な母語や国籍の児童が同じクラスで勉強するようになっている。具体的な国籍や母語の割合は指導にあたっていた筆者自身にも分かり得ない。筆者が受け持っていた児童の中に、友人同士の会話でも日本語を使わない児童は 1 人いたが、それ以外の児童は全員日本語で会話をしていた。

2. 使用教材

2.1 教科書

「日本語」の授業で使用している教科書は文部科学省検定済教科書で、いわゆる日本の公立小学校の「国語」の授業で使用している教科書と同じものだ。所属学年に当たる教科書を使用し、指導している。他のインターナショナルスクール等では、所属学年の 1 つ下の学年の教科書を使用する学校もあるようだが、筆者が指導していた中華学校では所属学年の教科書を使用していた。

しかし、この教科書で指導することには非常に困難が伴う。この教科書は元々日本の公立小学校で使用するために、作られているものである。日本の公立小学校や学習指導要領に沿って授業を行っている学校は、「国語」の授業がどの教科と比べても一番多く、小学 3 年次では、年間で 245 時間勉強することになっている。全教科を合わせると年間で 945 時間勉強することになっているため、全体の 1/4 以上を占める時間が「国語」の授業に割かれることになる。しかし、筆者が指導していたのは、中華学校で、いわゆる筆者が勉強してきた「国語」の授業はメインではない。言語教育の 1 つとして捉えられている。日本の学校が 1 週間に 7 回ほど「国語」の授業が行われているのに対し、中華学校の「日本語」の授業は 1 週間に 4 回しかない。つまり、半分の時間で、この教科書を終わらせなければならないのである。

2.2 あかねこ漢字スキル

次は、使用していた副教材を説明する。『あかねこ漢字スキル』という、いわゆる「漢字ドリル」である。教科書に準拠している教材で、新しい漢字を勉強したり、漢字を復習したりするために使用されていて、公立小学校等でも同じように使用されている。

見開き 1 ページで 1 単元の勉強をすることができるようになっていて、右のページでは、新しい漢字の書き順、読み方、その漢字を使った言葉の勉強や実際に自分で書いて練習できるようになっている。左のページでは、右ページで勉強した漢字 1 つにつき、その漢字を使った言葉が 1 つ書いてあり、巻末にある漢字テストの勉強ができるようになっている。本稿では、この『あかねこ漢字スキル』の使い方の工夫した点や日本語の漢字の定着を図って行った活動について報告していく。

2.3 テスト

日本語の定期テストでは、教科書準拠のテストを使用している。中華学校では、定期テストの期間が前期後期に2回ずつあるため、その期間中に行われる。教科書の内容は全てテストで扱わなければならないため、その全てのテストを4回に分けて行っていく。つまり、テストを行うために、各時期のテストまでに行う範囲全ての単元を終わらせていなければならないということになる。これが筆者をはじめ日本語科の教員の教科書の進捗の目安になっていると言っても過言ではない。

1回のテストで平均3つの単元のテストを行う。日本の公立小学校では、ほとんどの児童が100点を取れるようなテストであること、学校の決まりとして「テスト前に必ず復習を授業内で扱わなければならない」ことから、45分でA3版両面3枚のテストを行っても時間が余ってしまうほど、簡単なテストだ。しかし、学校の決まりとして、「定期テストで60点以下の場合は追試を行う」ことになっており、毎回学年で2.3名は追試を受験していた。対象者は来日して間もない児童だけでなく、日本語における家庭学習の習慣があまりない場合が多く、毎回の追試をみてもほとんどメンバーに変化はなかった。

3. 1年目の問題点

1年目を終えて、筆者自身の指導に関する問題点がいくつか見えてきた。先述したように、様々な点で制約が厳しいこともあり、単元を全て終わらせ、理解させることに重きが置かれてしまったことが、問題点の1つとしてあげられる。

そういった時間的な制約があるため、「ゆっくり板書をとる」時間もなかなかとることができなかったが、教科書を写したり、作文を書いたりすると、日本語の漢字に混じって、日本語の漢字とは異なる漢字がノートに並んでいることに驚いた。中国語の漢字と日本語の漢字が混同してしまっていた。混同の仕方も一様ではなく、日本語の漢字を10回練習しているはずが、その中のいくつかが中国語の漢字だったり、他の漢字は日本語で書いてあるのに、ある漢字だけは全て中国語の漢字だったりしていた。その都度、日本語の漢字と児童自身が書いた漢字を見比べさせ、「どこが違う？」のように、児童自身の「気づき」を大切に指導してきたが、このような現象は筆者が担当していたクラスだけでなく、学年が上がっても同様の問題があることを高学年の先生から聞いて知った。

また、下記の表は漢字テストの結果をまとめたものだが、成績が上がったかと思えば、最終的には成績が下がってしまっている。これは、この時期の半分以上のテストが、1年間のまとめテストだったことが個々のテストの平均点が非常に低いことから分かっている。このことから、1年間勉強してきた漢字はほとんど定着していなかったことが分かる。

表1 1年目 漢字テスト結果平均点 (100点満点)

	前期・中間	前期・期末	後期・中間	後期・期末
小2	—	83.93	87.11	83.53
小3	—	81.46	88.14	76.49

4. 改善点

1年目の問題点を受け、2年目はどのようにしていくことにしたかを以下にまとめます。

児童は、日本語と英語の授業、休み時間以外は中国語を話し、中国語の漢字を使って勉強している。これは、家族の母語や自身の母語にかかわらず、ほとんどの児童が同じように過ごしている。つまり、学習言語は中国語、生活言語は日本語となる。BICS と CALP という考え方もあるが、各家庭や児童自身の様々な要因が絡まり、一概には言えないため、本稿では扱わない。あくまでも学校で過ごす際の言語ということに限定しておく。そのため、日本語の漢字を読んだり、書いたりする機会が非常に少ない。この状況から、日本語の漢字の定着度を上げるためには、日本語の漢字に触れる機会を増やす必要があると考えた。しかし、日本語の授業数を増やすことは簡単にはできない。そこで、1週間に4回ある授業を全て異なる曜日に入れてもらえるよう、担当に交渉した。そうすることによって、毎回の授業で宿題に取り組むことができ、日本語の漢字に触れる時間が触れる。さらに、字を書く際に、今書こうとしている字が「どのような字なのか」ということを意識してもらうため、「きれいな字を書くこと、トメハネに注意すること」を今まで以上に指導するようにした。具体的な改善点を以下に述べる。

4.1 フラッシュカード

1つ目の改善点は「漢字の読みのフラッシュカード」を追加したことだ。先述したように、授業の終わりには毎回宿題出すことにした。中国語を使うほとんどの授業では毎回大量の宿題が出ているため、宿題を出さなければ、日本語はどんどん忘れられてしまう。それを回避するためにも、宿題は不可欠だ。それをやってきたかどうか、保護者のサインをもらってきたかどうかを毎回授業の最初にチェックしていた。その間、有効的に時間を使うために、児童には、フラッシュカードの範囲は2単元分である。具体的には、現在学習している単元と1つ前の単元の漢字を扱う。1人の児童が前でそのフラッシュカードを用いて漢字を見せ、他の児童は出てきた漢字を次々に読み上げていく、という要領で毎回の授業で行う。「1回間違えても次は正しく読めるように」と、毎回2周行うようにした。

4.2 書き順チェック

2つ目の改善点は「書き順チェック」の活動を追加したことだ。児童が使用しているノートや漢字ドリルはマス目があり、児童は、日本語の授業でも、中国語の授業でも、1マスに1字書くように指導されている。そのため、この書き順チェックのときにも、教員が黒板に大きく正方形を書き、児童はその中に漢字を書くことになっている。例えば、小学3年字の配当漢字である「横」という字であれば、15画であるため、1人が1画ずつ書き、15人で漢字を完成させていく。「書き順チェック」という名目で行っているが、他の狙いもある。児童には日常的に正方形に対して、それに合う大きさで、丁寧に書くことを指導しているため、1画の長さがその漢字の出来に大きく関わってくる。そのため、児童は自分たちの担当の漢字がうまく書けるか、友人が書いている黒板をじっと見て、「長すぎ、

短すぎ」と言ったり、上手く書けたら拍手したりしながら、活動を楽しんでいた。漢字に興味を持たせるだけでなく、「その漢字がどのように成り立っているかに関心を持ってもらう」ことが先述した他の狙いとしているものだ。

4.3 あかねこ漢字スキル

3つ目の改善点は『あかねこ漢字スキル』の勉強方法の変更だ。先述の方法と基本的には変わらないが下線部が2年目に追加した活動だ。

- 1回目：単元前導入、読み練習、書き順チェック
- 2回目：書き練習
- 3回目：テスト前書き練習、1回目テスト
- 4回目：2回目テスト
- 5回目：苦手問題練習、「漢字のかんづめ」

以下に詳細を示す。

あかねこの1回目は、教科書で新しい単元に入る前にその単元で使用する漢字の学習を『あかねこ漢字スキル』の見開きの右ページを用いて、行う。その際に、定着度を上げるために、先述した「書き順チェック」を行うようにした。

2回目の授業では、見開きの左ページの3段ある中の1段目と2段目までを書いて、テストの出る言葉の練習を行う。

3回目の授業では、テストを行うため、その前に1回練習をする。どのように練習するかというと、前日までに書いている部分を隠して、教員が読み上げた言葉を3段目に書く。自分が書いた答えが合っているかどうか、確認してからテストに臨む。全員の準備が終わってから、テストを行う。

4回目の授業では、3回目に行ったテストを返却し、2回目のテストを行う。2回目のテストの前には、1回目どこを間違えたのか、児童が自分で教科書や『あかねこ漢字スキル』を用いて確認をしてから、1回目の答え、問題を隠して、2段目に教員が言った言葉を答えとして書く。

5回目の授業は、復習である。2回目で間違えた言葉を裏のページに2行練習し、その後、同じく裏のページにある「漢字のかんづめ」という文章中のひらがなを漢字に直す問題に取り組む。以上が1つの単元の漢字の学習の流れだ。これを単元ごとに繰り返して、学習を進めていく。

5. 授業の流れ

ここまで述べたことをまとめると、以下のような授業の流れになる。授業開始5分ほどは、教員が宿題チェックを行い、その間児童はフラッシュカードで漢字の読みの学習を行う。その後は全体の活動である。次に、『あかねこ漢字スキル』の2回目以降の活動を行う。その日によって、テストのための練習をしたり、テストをしたりする。時間にすると5～8分ほどだ。それが終わってから、残りの時間で、メインの授業を行う。日によって、活動内容は異なるが、教科書の文章読解を行ったり、『あかねこ漢字スキル』で、教科書の新しい単元に入る前の漢字の学習を行ったりする。このようにルーティンにすることで、児童も授業の流れを理解し、無駄な時間が省け、授業に使える時間を増やすこともできた。

6. 結果

ここまで1年目の反省を受け、2年目に行った改善点について述べてきた。以下の表は授業内で行っている『あかねこ漢字スキル』の漢字テストのそれぞれの時期での平均点だ。

表 2 2年目 漢字テスト結果平均点 (100点満点)

	前期・中間	前期・期末	後期・中間	後期・期末
小3	80.32	75.72	80	79.9

定期テストごとに成績を提出しなければならないのだが、その成績の一部として反映しているものを学年全体の平均点という形で表にまとめた。1回のテストで7,8回ほどの漢字テストの結果をまとめている。表1の前期中間が空欄になっているのは、有効なデータが残っていなかったためだ。

では、表2を見ていく。学習指導要領の改定はなかったため、表1の小3と表2の小3は全く同様のテストを受験している。前期期末でぐっと平均点が下がり、その後少しずつ上がっているように見えるが、5%の有意水準で有意差は認められなかった。しかし、表1の小3と比べてみる。表1の前期中間の成績はデータがないため、比べることができないが、前期期末、後期中間では、表1の小3の方が平均点が高く、5%の有意水準で有意差も認められた。つまり、1年目の小3の方がよくできている。しかし、後期期末では、有意差が認められなくなる。つまり、今まで1年目の小3を下回っていた2年目の小3の成績が少し向上したといえる。また、この後期期末の漢字テストは半分以上が1年間のまとめのテストであることから、1年間学習してきた漢字の定着度が増したといえるのではないだろうか。

7. まとめ

1年目と2年目では同じ小3で同じテストでも違う児童を比べているため、個々の学習能力に差があり、単純に比べることは難しいが、後期期末のテストという1年間のまとめのテストでも成績が下がらなかったという点を評価することができると考える。今まで述べたことをまとめると以下のようなになる。まず、時間割を組む際から、1日でも多く日本語の授業を行えるように交渉することから始まり、日本語の漢字だけでなく、日本語に触れる時間を少しでも増やす努力をした。同じ日に2時間授業があっても宿題やテストは1回しかできないからだ。

同じ漢字を定着させるという目的でもいくつかの活動を用いたことにより、児童が飽きずに1年間取り組むことができた。飽きずに取り組めたことにより、成績が若干ながら上がったといえる。小学部の日本語科の教員は全員が非常勤講師だったため、情報の共有や学年を跨いだ指導の一貫性において困難な点が少なくない。また、学校や保護者の方針もあるため、どのようにすべきか、というのは一概に述べることはできないが、漢字の指導において、工夫のしがいがあることが2年間の指導を通して分かった。

参考文献

- 黄丹青（2005）「日本における中華学校のバイリンガル教育実践に関する一考察—横浜山手中華学校を事例として—」『国立教育政策研究所紀要』,134, 143-154,国立教育政策研究所
- 陳天璽（2009）「研究ノート：中華学校に通う日本の子どもたち」『文化人類学』,74（1）,156-175,日本文化人類学会